

## 聖アンセルムスの存在論的証明 における神の概念について

山 崎 照

最近 Norman Malcolm は、The Philosophical Review LXIX (Jan. 1960) において《Anselm's Ontological Arguments》という論題のもとに Anselmus の Proslogion 第3章における神の存在論的証明に対する新解釈を提起したのであるが、これが学界の著しい注目の的となり、丁度その1年後には、同誌 LXX (Jan. 1961) はその大半がそれをめぐる諸家の討論の場として献ぜられたのである。そこに所載の下記の論文は、その標題からも伺われるように、Malcolm に対する反響として、何れも極めて示唆に富んだ見解を披瀝している。

### DISCUSSION

The Ontological Argument	R. E. Allen
Not Necessarily	Raziel Abelson
On the Second Ontological Argument	Terence Penelhum
A Valid Ontological Argument ? .	Alvin Plantinga
Uses of the Ontological Argumet	Paul Henle
On Conceivability in Anselm and Malcolm	Gareth B. Matthews

ここにおいては諸家の論鋒は、主として Malcolm の批判に向けられているが、他方 Charles Hartshorne は、Union Seminary Quarterly Review, XVII (Mar. 1962) において《What Did Anselm Discover ?》という標題を立て、Malcolm に似た線上で神の非存在の論理的不可能性を論じて、存在論的証明の妥当性を解明しようとしている。これが又、論議の

的となり、同誌 XVIII (Nov.1962) は、再び Malcolm 及び Hartshorne に対する批判として、Cyril C. Richardsonの所論 ≪The Strange Fascination of the Ontological Argument≫を掲載した。

更にこれに対する答弁として、同誌 XIII(Mar. 1963)は、三度≪Further Fascination of the Ontological Argument≫の標題のもとに、Charles Hartshorne, Jovan Brkić, W. Richard Comstock の三者の所論を発表した。

このように神の存在論的証明の問題は、今や新たな様相を呈して復活し、今日の神学的論争の主要テーマの一つとなっているのである。それは深く人間性の問題に根ざし、Kant の批判や Russell の記述論も決してそれを根絶することはできなかつたようである。又このことはそれが信仰の知的理解に資する何らかの可能性を有するものであることを物語っているように思われる。我々の論述も又、この点を示唆するに止まるのであろう。

Anselmus の Proslogion 第2章における神の存在論的証明は、周知の如く次のように要約され得る。即ち、もし神が、それよりも大なるものは何も考えられ得ないもの (aliquid quo nihil maius cogitari possit) と定義されるならば、神の存在はこの定義から演繹され得る。何故なら、もし神が知性の中 (in intellectu) にのみ存在するものであって、現実の中 (in re) には存在しないものであれば、現実の中に存在するものの方が、知性の中に存在するものよりも大であるが故に、神はそれよりも大なるものは考えられ得ないものではなくなるからである。

≪もしそれが実際に知性の中にさえ存在すれば、それは現実の中にも存在すると考えられ得る。何故ならかかるものの方が、より大なるものであるからである≫ (Proslogion 2)

上述の存在論的証明は、Malcolm の解釈によれば、知性におけるもの (概念) よりも、現実におけるもの (その対象) の方が大であるという前提に基づいている。しかし概念とその対象とについて大小関係を論ずるこ

とは、論理的に妥当ではない。例えば現実の1ドルと想像の1ドルとは同額であり、又現実の2ヤードと想像の2ヤードとは等量でなければならず、さもなければ我々は何物をも思惟し得ないであろう。従って前者が後者よりも大であることはあり得ないのである。即ち概念とその対象とは、厳密に対応し、その意味において全く同等のものでなければならぬのであって、さもなければ概念の検証は不可能となるのでであろう。従って現実に関係があるものが存在しているか否かの問題が、そのものの記述に影響を与えることはあり得ないのである。

Kant は正しくこのことを《存在は述語ではない》という論理学的原理を立てて表明したのであり、Malcolm はこの Kant の格言に則って Proslogion 第2章の存在論的証明を次のように否認する。《Proslogion 第2章の Anselmus の存在論的証明は誤謬である。何故ならそれは、存在が完全性であり、従って存在が現実的な述語であるという誤った学説に基づいているからである》<sup>(1)</sup>

そこで Malcolm は次に Proslogion 第3章の考察に進み、Proslogion 第2章における第1の証明方式と、その第3章における第2の証明方式とを区別する。而して彼の論文の目的は、この第2の方式を擁護し、それが第1の方式の誤謬に陥っていないことを主張することであった。勿論 Anselmus 自身はそれを自覚してはいなかったであろうが、Malcolm によれば、彼の存在論的証明には二つの異った論法があり、その第1の方式は誤謬であって、その第2の方式が妥当なのである。ところで彼が問題とする Proslogion 第3章におけるいわゆる第2の存在論的証明は、次の通りである。

《存在しないとは考えられ得ないものは、存在しないと考えられ得るものよりも大である。従ってもしそれよりも大なるものは考えられ得ないものが、存在しないと考えられ得るならば、それよりも大なるものは考えられ得ないものそれ自体が、それよりも大なるものは考えられ得ないものではなくなる。しかしこのことは矛盾である。従ってそれよりも大なるもの

は考えられ得ないものは、存在しないとは考えられ得ない程、真実に存在する》(Proslogion 3)

上述の Anselmus の存在論的証明に徴して、Malcolm はその証明の論拠たる《aliquid quod non possit cogitari non esse, quod maius est quam quod non esse cogitari potest.》を《その非存在が論理的に不可能なものは、その非存在が論理的に可能なものよりも大である》と解釈し、このように解釈することによって存在論的証明にまつわる哲学上の問題を大いに解明し得ると言う。即ち Malcolm の解釈においては、《non possit cogitari》及び《cogitari potest》が、字義通り《考えられ得ない》及び《考えられ得る》とは翻訳されずに、《論理的に不可能》及び《論理的に可能》と翻訳されている。彼はこの解釈に基づいて Anselmus の神の存在論的証明の改造を試みるのである。即ち Malcolm によれば、非存在の論理的不可能性、乃至存在の論理的必然性は完全性であり、従って現実的な述語たり得るものである。そして彼はこの前提に基づいて、いわゆる Anselmus の第2の存在論的証明に対し、次のように解説を加える。

《それよりも大なるものは考えられ得ないものである神が、もし存在しなければ、神が存在して来ることはあり得ない。何故ならもし神が存在して来たとすれば、神は存在せしめられたか、又は偶然的に存在するようになったかの何れかであるが、何れの場合にも、神は有限的なものとなるであろう。しかし我々の神の概念によって神は有限的なものではない。神が存在して来ることはあり得ないのであるから、もし神が存在しなければ、神の存在は不可能である。

もし神が存在すれば、神は(上述の理由によって)存在して来ることも、又存在しなくなることもあり得ない。何故なら何ものかが神を存在しなくすることはあり得ず、又偶然的に神が存在しなくなることもあり得ないからである。従ってもし神が存在すれば、神の存在は必然である。

故に神の存在は不可能であるか、必然であるかの何れかである。

神の存在が不可能であるのは、そのようなものの概念が自己矛盾であるか、又は或る点において論理的に不合理である場合に限られる。

この概念がそのようなものでないとすれば、神は必然的に存在するといふことになる<sup>(3)</sup>》

以上の Malcolm による第2の存在論的証明の論理的構造は、次のように分析され得る。

(1)もし神が存在しなければ、神の存在は論理的に不可能である。

(2)もし神が存在すれば、神の存在は論理的に必然である。

(3)故に神の存在は論理的に不可能であるか、必然であるかの何れかである。

(4)神の存在は論理的に不可能ではない。

(5)故に神の存在は論理的に必然である。

まず(3)は(1)の後件と(2)の後件とよりなる選言命題であって、これは神の存在命題は論理的に偶然ではないという命題と等意である。

ところで(1)の後件(1c)《神の存在は論理的に不可能である》は、我々の神の概念からの派生命題 (a) 《神が存在して来ることはあり得ない》、及び(1)の前件(1a) 《神は存在しない》から帰結される。

(a) 神が存在して来ることはあり得ない

(1a) 神は存在しない

---

∴(1c) N(神は存在しない)

[註]命題に前置された記号Nは、その命題が論理的に必然であることを示す。

又(2)の後件(2c) 《神の存在は論理的に必然である》は、やはり我々の神の概念からの派生命題 (b) 《神が存在しなくなることはあり得ない》、及び(2)の前件(2a) 《神が存在する》から帰結される。

(b) 神が存在しなくなることはあり得ない

(2a) 神が存在する

---

∴(2c) N(神が存在する)

しかし、Malcolm のこれら二つの三段論法は妥当ではない。何故なら何れの場合にも、(1c) ≪神は存在しない≫、乃至(2c) ≪神が存在する≫という存在命題の必然性は帰結されないのであって、そこに帰結されるものは、むしろ(1c)' ≪もし神が存在しない時があれば、神は常に存在しない≫、乃至(2c)' ≪もし神が存在する時があれば、神は常に存在する≫という条件命題の必然性であるに過ぎない。

然るにこれら二つの条件命題の必然性は、それらの後件たる神の存在命題、即ち≪神は常に存在しない≫、乃至≪神は常に存在する≫という命題の必然性を意味しない。

従って神の存在命題は論理的に偶然ではないということを主張する選言命題(3)は成立しない。

ところで Malcolm は、≪神の存在が論理的に偶然である≫という命題は神の概念に矛盾すると考えている。しかしながら≪神の存在は必然である≫という主張には、論理的な意味とは別の宗教的な意味がある。神の存在は、その他すべてのものの存在に不可欠であるが故に、必然であり、これに対してその他すべてのものの存在は、神の存在に依存しているが故に、偶然であるといわれるかも知れない。確かにこの種の必然性は、全能性と同様、神の無制約性を分析すれば、当然現われてくるものである。従って神は必然且つ全能である。しかしこの宗教的な意味での必然且つ全能なるものが存在するか否かは、論理的には全く偶然である。宗教的な必然性と論理的な必然性とを、又宗教的な偶然性と論理的な偶然性とを同一視することは、哲学的に根深い思惟の混乱である。≪神は全能である≫は論理的に必然であるけれども、≪全能者がある≫は論理的には偶然である。神の存在は非論理的な意味においては必然であると同時に、論理的な意味においては偶然である。従って≪神の存在が論理的に偶然である≫は神の概念に矛盾しない。もし≪神が存在する≫が、論理的に偶然であれば、神は依存的なものであると主張することは、二種の偶然性の混同である。

しかも(4)において Malcolm は、選言命題(3)の最初の選言肢「神の存在は論理的に不可能である」を否定するためには、存在を神の述語とせざるを得ないのである。ところでもし存在を神の述語とするならば、この第2の存在論的証明は、第1の存在論的証明に還元されてしまうであろう。然るに彼は、存在が述語でないという理由によって、この第1の存在論的証明を斥けたのである。これは正しく彼の Anselmus 解釈の自己矛盾である。

この点に関しては、Cyril C. Richardson の注目すべき批判がある。「Anselmus の場合に二つの異った証明があるのではない。唯一つの証明があるに過ぎない。それらの方式は共に抹殺され、或は崩壊する。何故ならそれらは共に神の場合に存在が述語であることを含意しているからである」<sup>(4)</sup>

要するに Malcolm の求める非存在の論理的不可能性が、神に適用され得るのは、次の二つの場合に限られる。

- 1) 神の存在が最初に前提されている場合
- 2) 神について存在が述語である場合

然るに Malcolm は 1) の場合を肯定することは殆んど不可能である。

彼はまさしくその神の存在を証明しようとしているのであるから、最初に前提されたものを結論することは無意味である。

彼はまた 2) の場合を是認することもできない。何故なら彼は「存在は述語ではない」という Kant の格言に従って、Proslogion 第2章のいわゆる第1の存在論的証明を否認したからである。

従って Malcolm の求める非存在の論理的不可能性は、神に適用され得ない。

従って Anselmus の Proslogion 第3章の根本原理「aliquid quod non possit cogitari non esse, quod maius est quam quod non esse cogitari potest.」を Malcolm のように「その非存在が論理的に不可能なものは、

その非存在が論理的に可能なものよりも大である」と解釈することは全く無意味である。むしろここで Anselmus は字義通り「その非存在が考えられ得ないものは、その非存在が考えられ得るものよりも大である」と語り、端的には存在 (esse) が非存在 (non esse) に優ることを表明しているのであろう。《esse est maius quam non esse.》

Kant の場合にはこの Anselmus の根本原理が《esse in re est maius quam esse in intellectu.》と狭義に解釈され、両者の量的な大小関係《maius quam》が否定されることによって、存在論的証明の妥当性も否定されたのである。

ところで Malcolm のいわゆる第2の存在論的証明の場合には、その大小関係《maius quam》すら不問に附せられ、《esse vel non esse》の選言命題に、歪曲されてしまった結果、その意図に反して神の存在の論理的偶然性を帰結する結果に終わったのである。

ところでもし Anselmus の存在論的証明におけるこの《maius quam》が存在についての価値観を表明するものであれば、Kant の場合はその否定であり Malcolm の場合はその無視であろう。しかしながら、Anselmus 自身は明らかに Kant や Malcolm とは異った価値観をもっていた。そして存在が非存在に優るのはここにおいてである。存在論的証明は勝手な見地から解釈されてはならないのであって、むしろ彼の思想体系全体の縮図として、その価値観に基づいて理解されなければならない。この証明の妥当性をめぐって古来議論が尽きないのは、その問題が純粹に論理的なものではないからであろう。もし Anselmus の証明の欠点が、単に論理的推理の誤謬であるに過ぎないならば、それは既に解決されて問題を残さないはずである。古来それを擁護する者も批判する者も共に何れ劣らぬ明敏な論理学者たちである。恐らく彼らの意見の不一致の根拠は、最初から論理的なものではなくて、むしろ存在論的なものであろう。そしてそれをめぐる議論は、存在そのものの本性についてのそれぞれ異った見解の出会い



いの場として興味津津たるものである。かくしてその証明が人によって妥当であると思われたり、又妥当でないと思われたりするの、何れかが論理的誤謬を犯しているからではなくて、むしろ彼らが互いに相容れない存在論的地盤の上に立っているからである。Anselmus の神の存在論的証明は、彼の形而上学の哲学史的背景を考慮しなければ、そのもつ意味を十分に理解し得ないであろう。この場合特に強調されなければならないのは、Platon-Augustinus 的な思想の系譜において Anselmus の占める立場であろう。

Proslogion の序言において Anselmus は「それよりも大なるものは考えられ得ないもの」という概念を次のように定義する、「それはそれ以外の如何なるものをも必要としない最高善 (summmum bonum) であり、それ以外のすべてのものは、それらが存在し、しかもよく存在するために、この最高善を必要とする」

又、そのような概念を人は決して理解し得ないという Gaunilo の反論に対して、Anselmus は次のように答弁する、「小なる善でも、それが善である限りは、すべてより大なる善に似ているのであるから、如何なる理性的精神にも明らかなように、より小なる善から、より大なる善に昇っていくことによって、それよりも大なるものが考えられ得るものから、それよりも大なるものは考えられ得ないものを十分推量することができる<sup>(5)</sup>」

以上の論述に徴して明らかなように、「善きもの」と「より善きもの」との価値の差異が、存在の窮極の段階における最高善を予想させるというのが Anselmus の論法であって、彼は Gaunilo に答弁するに当って、その存在論的証明を Monologion の宇宙論的論法を以って擁護しなければならなかったのである。即ち彼の存在論的証明は、価値のヒエラルキアに基づく Platon-Augustinus 的な宇宙論によって裏付けられていたのである。最高善とは、それよりも善なるものは考えられ得ないようなものである。このようなものは、存在しないものとしては考えられ得ないものである。

何故ならば存在しないよりも存在するほうがより善いからである。ここにおいて次の三段論法が可能となる。

(1)存在するものはすべて、存在しないものに優る。

(2)神は、すべてのものの中でそれに優るものは何も考えられ得ない最高のものである。(quidam summum omnium quo nihil melius cogitari potest)<sup>(6)</sup>

(3)故に神は必然的に存在するものである。何故なら存在するものはすべて、存在しないものに優るが故に、最高善である神は、存在しないものに優るところの存在するものでなければならないからである。

これが Anselmus の存在論的証明の論旨であると思われる。従ってその小前提たる神の定義に見られる「*maius quam*」乃至「*melius quam*」は、Kant の批判に見られるような没価値的な大小関係を示すものではなくて、むしろ存在の価値を表わすものであり、そこから神の存在は必然的に帰結されるのである。勿論それらの前提を承認するか否かは、証明以前の別問題であって、もしそれらを承認する程の信仰を有するものであれば、その信仰の対象が、キリスト教的な存在の価値につながるものであることを、ここに理解するに至るであろう。

〔附記〕 本稿は、昭和37年聖心女子大学における第11回中世哲学会に際しての研究発表の草稿に加筆したものである。

## 註

(1) Norman Malcolm, "Anselms, Ontological Arguments," *Philosophical Review*, LXIX (Jan.1960), p.44.

(2) *Ibid.*, p.45.

(3) *Ibid.*, pp. 49—50.

(4) Cyril C. Richardson, "The Strange Fascination of the Ontological Argument," *Union Seminary Quarterly Review*, XVIII (Nov. 1962) p.8.

(5) Anselmus, *Liber Apologeticus*, C. VIII.

(6) Anselmus, *Proslogion*, C. V., C.XIV.